

子どもの心の安定をめざした図画工作科学習指導

～セルフイメージを高揚させるための造形活動を通して～

横田 恭典（よこた やすすけ） 福岡県 筑後市立水田小学校いずみ分校 教諭

〈概要〉

ここ数年、メディアで頻繁に取り上げられるのが、幼い子どもたちの虐待や事件である。幼い命の人権が守られずネグレクトや暴言、暴力の対象にされている。そんな子どもたちの一部が、この情緒障害児短期治療施設である「筑後いずみ園」に入所し、併設されている「筑後市立いずみ分校」に転入して行く。分校の児童数は、今現在、10人と少ないが、学期の途中からでも、急な転入転出があり、1年の中でも学級の構成員が大きく変わってくる。

転入してくる子どもたちは、どの子も概して学力面に課題を有している。セルフイメージが低かったり、正しい自己判断がつきにくく、ひどく失敗を恐れたり、人を信頼できずに人とのつながりを否定したりする傾向が強い。また、楽しさや喜び等、心を開いて味わうことも少ないために表情が硬く、暗い。

そんな子どもたちのセルフイメージを高め、人とのつながりを持たせ、造形活動の楽しさや喜びを味

わわせたい。そのために、「自分のことに気づく」「自分を表現する」「人とつながる」の3つの視点を設定し、造形活動の実践を試みた。これは、子どもたちが自分に自信を持ち、自分の心の中を表出し、友達や周りの人との関わりやつながりを持たせることにつながると考える。このことは、情緒心理養育施設や通常学級等での発達障害を有する児童の心の諸問題を解決していく上でも重要な点と考える。

この実践を通し、造形活動の楽しさを見だし、自分の気持ちに向き合い表現する児童の姿を見ることができた。また、子どもたちには笑顔が見られ、友達との関係や園の先生たちへの対応の仕方も変わっていった。園の先生方からは、笑顔が多くなると成長を喜んでいただいた。心理士の先生方からは、アートセラピーとしての効果を評価し、意義を認めていただいた。



目次

はじめに

1 主題設定の理由

2 児童の実態

3 授業の実際

ア 彫り進み版画

「自分のこと」に気づく」視点から

イ 気持ちと形・色・表現方法

「自分のこと」に気づく」視点から

ウ モビールづくり

「自分を表現する」視点から

エ 自分の思いを表現しよう

「自分を表現する」視点から

オ 心のタワーで

「自分を表現する」視点から

カ お面づくりと劇

「人とつながる」視点から

4 おわりに

5 研究の成果と課題

はじめに

私が勤務している「福岡県立筑後いずみ園」は情緒障害児短期治療施設で、全国に43ある施設の一つである。情緒障害児短期治療施設では、「心理的困難や苦しみを抱え、日常生活の多岐にわたって生き辛さを感じて心理治療を必要とする子どもたちを、入所あるいは通所させて治療を行う施設です。子どもたちの社会適応能力の育成を図り、将来健全な社会生活を営むことができるようになることをめざします」（全国情緒障害児短期治療施設協議会HPより）とあるように、子どもたちの心理的な困難さや苦しみ、生き辛さなどを短期的にはあるが、一年以上の期間を園の施設で生活指導や心理治療を継続して行っている。分校では、その中で子どもたちの健全な成長発達のために教育で何ができるのかを探りながら図画工作科指導を行っている。

私のクラスは5年生2名6年生2名の計4名が在籍している。家庭的な事情によりネグレクトやFVなどの影響から、心理的な面での障害を有す結果となっている。教育の困難さはいうまでもないが、人を信じる心を無くし、心を閉ざしている児童が多い。何よりも自分に対する自信をなくしている。当然、自己肯定感が低く、人とのつながり（関わり）も弱い。そんな児童に、図画工作科教育を通して、自分を発見し、見つめ、表現することの楽しさや、人とつながることの素晴らしさを味わうことで自分に対する自信を少しでも高め、自分を少しでも好きになってもらいた

いと考えている。

造形活動を教科内の一活動としてだけでなく、この子どもたちの心の安定を図れるものとしての教育的な効果が発揮できるのなら、アートセラピーとしての役割が果たせるのなら、今後の図画工作科教育の価値を大きく高めてくれるだろうと考える。このことは、通常の学校でも、多くの境界域の発達障害を持つ児童の心の成長に寄与する図画工作科教育の役割を果たすことになるのではないかと考えている。

今回の実践は、図画工作科教育を通して児童が「自分のよさに気づき」「自分を表現し」「人とつながる」大切さに気づいていけるように学習を発展的に取り組んできた。

1. 主題設定の理由

○ 特別支援教育の視点から

現在学級の中には何らかの形で発達障害を有する児童数が普通学級の中でも6・5%存在する（文科省）といわれている。校内のどの子どもも、どの担任も障害を有する子どもと接し日常生活を送ることが常となっている。しかし、「普通」であることを基準とし、発達障害を有する子どもであっても、その子どもの内実を十分に理解できずに他者と同じようにできて当たり前と見る見方は教育現場で根強く残っているのも現実の問題である。

今、文科省は特別支援教育においては、「合理的配慮」という視点で、児童の特性に応じた教育活動を進めようとしている。「合理的

配慮」とは、「障害者が他の者と平等にすべての人権及び基本的自由を享有し、または行使することを保証する必要かつ適当な変更及び調整であって、特別の場合において必要とされるものであり、かつ、均衡を失した又は過度の負担を課さないものをいう。」(文科省HPより)としている。

今回取り組んだ実践は、この「合理的配慮」の提供の内の「個別の教育支援計画や個別の指導計画に対応した柔軟な教育課程の編成や教材等の配慮」に当たると考える。心に不安をかかえ自己肯定感が極端に低い児童たちにとって自分自身の見方を変えたり、ありのままの自分を受け入れられ認められたりする学習を展開することは意義深いと考える。

○アートセラピーの視点から

アートセラピーは、絵画や造形などの芸術を通して心のケアをする心理療法である。絵画や造形などを通じての自己表現は、自分自身でも見えない心や気持ちを映し出す鏡といえる。作品の善し悪しよりも創作活動の中で、自由に自分を表現することで、自分を癒していき、内にかかえている不安を解消したり感情を解放したりすることが目的だといえる。

様々な困難から、養育期においてネグレクトとして心の安心を得ることができなかった児童や様々な暴力・暴言、あるいは性的な虐待をFVとして受けてきた子どもにとって、自分の体験からくる心の闇を見つめる行為はとても辛いものだと思う。しかし、そこ

に依拠する様々な問題行動を見つめることで心の安定を図ることができたらどうかと考える。本施設に入所し、分校に通ってくる子どもたちの心の解放を造形活動を通して解放できるなら、図画工作科教育の表現としての本来の意味を発揮できると考える。

○人権・同和教育の視点から

自己を否定し、他者を否定し、人とつながることに何ら意味を感じていない本校の子どもの実態がある。しかし、自分が人から支えられ、又、人を支えることが可能な存在だということを実感することは、自分を信じるということと同じように人を信じる心を育てることもある。そして、自分に自信を持ち前を向いて一歩踏み出そうという意欲を持たせることにもつながる。また、多様な人々がつながり合い豊かな社会を築いていく上で欠かせない存在としての自分に気づいてくれるだろうか考える。

人権・同和教育では、これまで「生活綴り方」や「集団づくり」や「立場宣言」で自分を見つめ、仲間に自分の立場を証しながら、反差別の集団づくりを進めてきた。だがそれは、信頼しあえる仲間としての存在が明らかにされないなら、人権をも踏みこむる恐れしい行為になりかねない。図画工作科教育だけにとどまらず、クラスとしての人間関係を築きながら、個人の心を表現する造形活動を進めることが、本校児童にとってはカタルシスを得たり、自己肯定感を高揚したりする上で

意義深いものだと考える。

○児童の実態から

本校の子どもたちは、ネグレクトやFV、性的な被害などにより心身共に障害を有している。キレやすく、暴言・暴力で返し、人を傷つけると同時に自分もひどく傷つけてしまう。セルフイメージが低く、自己肯定感を持ってない子どもである。人を信頼し、人とつながることが難しい子どもたちでもある。子どもたちの課題は、子ども自身がつくったというよりも、その育ちの環境から派生したものが多く、何らかの発達の障害を有する。

このような子どもだからこそ、社会全体で支えることが必要となる。そこで、園での生活指導や心理治療と協働しながら、教育での取り組みを進めている。その中でも、アートセラピーとして子どもの心のケアを行えばと考えるに至った。尚、本実践の記載においては、子どもの個人情報について慎重に扱う必要があり、写真等についても部外秘とさせていただきます。

2. 課題解決のための方途

以上の主題設定の理由から、解決すべき課題を次のように整理した。

子どもたちは、自分のよさや悩みに向き合えず、他者を暴言や暴力で攻撃非難し、人とつながり他者と思いを共有するなどの視点やスキルを持ち得ていない。

そのために、まずは自分の置かれている状況や自分のことに向き合うことで、自分の悩みやよさに気づくこと、そして、造形活動を通してその思いを表出させ、鑑賞や表現活動を通して思いを他者と共有することが重要だと考えた。

この課題を解決するために、視点を3つに絞り授業実践に取り組むことにした。

視点①「自分のことに気づく」

図画工作活動が好きになり、集中して活動したり自分の成長を感じたりすることで、自分のことに関心を持つことができる。

視点②「自分を表現する」

自分のことに目を向けさせ、もっと知ることや自分の思いとつながる造形活動を通して、自分の思いを外に表出することができる。

視点③「人とつなぐ」

鑑賞という形で、自分の思いを出したり、他者の思いと重ね合わせたりすることや人とつながることの大切さに気づくことができる。

3. 授業の実際

(1) 視点1

「自分のことに気づく」ようにするための実践
視点1の「自分のことに気づく」ようにするための実践として、「彫り進み版画」と「気持ちと形・色・表現方法」に取り組んだ。

①「彫り進み版画に思いを込めて」

【彫り進み版画】

この題材は、版を「彫り」、色をつけて「刷る」という作業を繰り返すことで、重色や色のコントラストが面白く表現できる活動である。また、子どもの失敗という心理的なダメージよりも、版を重ねることにより新しい発見や驚きが引き起こされる意外性のある活動だといえる。作品の違いによって善し悪しがつきにくく、友達の作品のよさを認め合い子どもたちが自分や友達の作品のよさを発見しようとする学びの姿勢がしやすい。この活動で子どもたちは自分の作品に自信や喜びを持たせた。このことは制作後の児童の感想からも伺うことができる。(資料1)



〈資料1〉ピンクの色で好きな版画作品

〈資料1 制作後の児童の感想〉

- ・制作途中では、緊張しながら彫りました。先生に教えてもらったので、完成して自分でいい作品だと思いました。細かい所を彫る時はとても緊張し手が震えました。自分では◎だと思います。
- ・友達は細かいところや丸いところを彫るのがよかったです。
- ・色を重ねていく所がとてもきれいだと思いました。

② 「気持ち成形・色・方法で表そう」
【気持ちと形・色・表現方法】

ア〈色にうつる〉

○ 色から感じるイメージや思い①

色について受ける感じを引き出し、友達との感じ方の違いを交流することで、自分の色に対する感じ方を深く知ることができる考えた。(資料2)

各人が持つ色のイメージをプリントに書き発表することで、自分なりの見方を知り、友達との違いに驚いたり共通点を知たりすることができた。(資料3)

○ 色から感じるイメージや思い②

色名	受ける感じ・気持ち	色名	受ける感じ・気持ち
みどり	(しん)	ちいさ	(のびている)
オレンジ	(元気)	むらさき	(くらい)
まひる	(ひか、ひか)	オレンジ	(まぶしい)
あか	(あつい)	あお	(すずしい)

〈資料2 子どもの色のイメージ例〉

〈制作後の児童の感想〉

- ・こんなことは初めて考えて、自分でも不思議に感じる。
- ・色にも気持ちや思いを感じる。普段は、考えたことがなかったけど、考えてみると、いろいろな 気持ちを感じておもしろかった。
- ・色には、たくさんの気持ちや感じ方があるのがよく分かったので良かったです。
- ・色と色は反対の感じを持っていることが分かった。青と赤では涼しいと暑いという風感じた。

〈資料3 交流後の感想文〉

1. もっと、比べてみよう。

色名 黒	色名 白
受ける感じ・気持ち あく子、わっ、こい、男の子に 人気、わるそう、くらい、 みか、って、い、う、こと、を、き、か、な、い い、じ、わ、る、悪、に、と、と、取、お、い、 つ、ま、う、。	受ける感じ・気持ち 美、や、こ、い、ち、や、う、に、ん、子、 じ、や、う、な、つ、つ、り、ち、り、き、ん、ん、 て、ん、い、あ、か、る、い、け、ん、ま、 は、け、ま、し、て、く、丸、る、ま、ら、き、ら、 し、ん、ん、か、わ、い、い、吐、子

〈資料4 詳しく色のイメージを考えた〉

色を限定して考え、更に深くイメージを膨らませることで、自分なりの感じ方を大切にすることや友達との感じ方の違いと、それぞれの個性のよさを感じることができると考えた。(資料4)

より深く考え感じることができるよう、子どもたちが選んだ色について考えを書かせ交流した。一つの色について、いろいろな自分なりのイメージがあり、発表することで、だんだんと「自分らしく感じることに安心できるようになってきた。

子どもたちからは、「この授業をして楽しかった」「いろいろな人の意見を聞いて、色には、たくさん意味があることを知った」などの感想が出された。

○ 色から感じるイメージや思い③

自分の感じた色をつくる体験をすることで、自分のイメージに合った表現を工夫して色づくりをしていこうという意識を高めることができる考えた。

色づくりに余り時間をかけられなかったので、できあがった色を友達と共有することまではいかなかった。しかし、自分だけの色をつくり気持ちとつなげることができた。

子どもたちからは、「気持ちに合った色をつくってみた」「その時の気分なども色で表せることが分かった」などの感想が出された。

イ〈描き方・筆について〉

いろいろな描画材を使って、ぬり方を考えることで、より工夫しながら表現することができるだろうと考えた。

丸筆や平筆の小筆・中筆・大筆を使って好きな色を一色決めて描いてみた。また、糸や布、ゴムや紙、タンポや割り箸、指など自分の周りにある物や少し工夫してつくったもので描いてみた。

子どもたちは、いろいろな描き方や描画材を工夫しながら自分の表現方法に合うものを選んで描くことを楽しんでた。表現方法を幅広く持ち、自由に選択できることの魅力を感じてくれたようだ。

子どもたちからは、「いろいろなものを使ってやったら芸術的になった」「筆は身の回りにもあることが分かった」「今度は、いろいろな筆を使ってみよう」などの感想が出された。

ウへ水の量について

更に、水の量だけの变化に視点を当てることで、受ける感じが違うことを知り、表現に幅ができると考えた。また、より自分の表現したい表し方をみつけようとするだろうと考えた。

水の量の変化だけでも、しっかりと描き方をみつけられたと考える。子どもたちの表現には「のびのび」「つるつる」「ポカン」「べたべた」といったオノマトペがあり、描き方をイメージして表現したのだということが分かった。それぞれの持つイメージに合わせた描き方が表現できたと思う。

子どもたちからは、「色々な変わったやつができて、すごいと思った」「楽しかった。絵の具を使うのが好きになった」「色はぬり方で、とても一色には見えないくらい上手にぬれることが分かった」などの感想が出された。

エへ気持ちと形について

○ 形からイメージを

提示された形から受ける感じの違いを考えることで、形と気持ちを結びつけながら自分の考えを持って交流することができると考えた。(資料5)

子どもたちは、色と同様に、形からも気持ちが読み取れたり、形によって気持ちを表現できることを学んでくれたようだ。また、色や描き方の学習で感じたように、それぞれが持つ自由なイメージや同じようなイメージなど、多様な感じ方があり、そのどれもが自由

な発想や表現が保障されて

いることを十分に楽しみ表現する活動に没頭することができたようだ。

○ 感じるイメージの

交流





自分の気持ちに合ういろいろな形を工夫してつくったり、友達と交流したりすることで、気持ちと関連づけた形のイメージを広げ交流することができるようと考えた。

子どもたちは、自分の気持ちと形のイメージをつなげながら表現

活動を楽しむことができた。「自分らしい表現方法は」、「より自分の感じるイメージに合った表現方法は」どうかと考えながら造形活動を楽しむことができた。この学習で、自分らしく表現することのよさを味わうことができた。

子どもたちからは、「初めてこんなことを体験した。他の人は、いろいろなイメージがあるんだなあと考えた」「形でイメージを浮かべせると他の人とは違う考え方も出てきておもしろかった」「今度は、Cさんのまねをしてみたいです」などの感想が出された。

※線の太さもイメージを変えるよ

形	イメージや気持ち
	つんつんしたイメージ ゆさくないかんじ ゴツゴツしている
	穴みたい、マンホールみたい、しぼられている きついコロコロしている、きっちりしている ととのっているみかん、よからみたおみそ のあわんのかたど
	とまやいるしつのととがっている ふつう、こたえかでない、4じぶんとん こみた、いじり
	たろい、ゆた、いん、みつ、ま まーりん、やうみた、たろい あま(おじ)く、や、4るい

〈資料5 形から受けるイメージ〉

○ 繰り返しから受ける感じ

いろいろな形や、同じ形の繰り返しを体験することで、受け方の違いを感じ、楽しみながら形づくりを工夫することができると考えた。同じ形を繰り返して描くことで、楽しさが増し、進んで造形活動に取り組みることができた。

子どもたちからは、「描いているとだんだん楽しくなってきました。また描いて、この楽しさを味わいたいです」「形には、色々な想像がたくさん広がるということが分かった」などの感想が出された。

(2) 視点2

「自分を表現する」ようにするための実践

視点2の「自分を表現する」ための実践として、「モビールづくり」「鑑賞会」「心のタワー」を行った。

ア「気持ちを形に乗せて」

【モビールづくり】

思いに合う形を意識してつくりあげること
で、これまでの自分の思いの強い体験を振り
返り、表現の仕方を工夫しながら表すことが
できると考えた。

○ 思いをEMOJIN

喜怒哀楽の枠の中に自分の気持ちを書き込
み、一番強く思っていることについて、詳し
く書くようにした。

子どもたち一人ひとりが今までで体験した
様々な思いにつながる出来事から、教師にも
見せていい内容についてだけ喜怒哀楽として
書いた。それらは厳しい体験へ資料6 自分
の思い出の例文のほんの一面でしかないが、
今現在、心を開いて表せる精一杯のことだと
考えている。

○ 自分のつくりたいモビールを選ぼう

Aは退園していった上級生との仲がよく、
その子の優しい性格にあこがれ、自分の理想
としている。自分の過去現在未来をつくりな
がら、上級生の友達に釣り合う自分になりた
いと思いモビールづくりをしようとした。



〈モビールの制作途中のA〉

<p>喜び 家族がたたくさんや物をくれたよ。 ママにあえたこと。 かかいいおようふくがくれたこと。 おばあちゃんがかいてくれたこと。 ママが「世界一かかいいおじょうさま」 といってくれたこと。 かかいいママが「いること(うなみに34回)」</p>	<p>怒り めいれいされてはうかたった。 中学生からジョブをいっつもかくされてずっとか していたこと。 けんかしたときはいいわけされたこと。 テストでわからないうちにできるとかいて 10点しかとれなかったこと。 おにいちゃんに「おんがふたこと」。</p>
<p>悲しさ(寂しさ) きせいかできなくなつてすしかながい。 寝るるときに一人でおぼけかておぼけこれ これから生きてけるかなと思つて泣いた。 こわいママからに「おんがふたこと」。</p>	<p>楽しさ みんなと工作をしたこと。 自分で自分のものをかたりえらんたりして うれしかったこと。 よこた先生のクラスでよかめた。 おにいちゃんにせまうしたこと。 ママが「めいらくるおんがふたこと」 てくれたこと。</p>

〈資料6 自分の思い出の例文〉



〈モビールのパーツとしてつくりあげた各作品〉

<p>前の自分： 怒り、恨み、楽しい、 暇な気持ち。 前、先生に怒ったり、恨んだり、 友達と一緒に遊んだり、何もする ことがなかったりして、暇だった ときの気持ち。そして、悪い心。 茶色(悪い心) 赤(怒り) 青(恨 み) 黄色(楽しい) 白(暇)</p>	<p>今の自分： 卒業生Hと 出合って、Hのようにな りたいと思い、Hを青色 にし、どんどん近くなっ ている気持ち。</p>	<p>なりたい自分： Hと一緒にの 色。ほくはほくだから、ほく とHの形を変えた。</p>	<p>H君： Hの色を変えたの は、Hはいつも優しいけれ ど、怒ったりするから色を 変えた。</p>	<p>〈資料7 各パーツの意味〉</p>
--	--	---	--	----------------------

〈資料8 鑑賞後の子どもたちの感想〉

- ・いろいろな気持ち。優しい黄緑、青は怒る。そんな気持ちを色で表してからすごいと思った。三色使ったものもあった。
- ・Aさんが前の自分から、変わろうという気持ちが、よく伝わりました。
- ・「自分と友達」というところを聞いて、その人と、とっても仲がよいということが分かった



〈Aの作品〉

「自分の思いを表現しよう」
できあがった作品をもとに、自分たちの思いを表現し合わせることで、お互いのことをもっと理解し合えるだろうと考え鑑賞の時間を設定した。鑑賞に当たっては、まず友達の作品を見て、どんなことを表現しているかを想像して考えを発表させた。次に、制作者から作品の紹介として、どんな気持ちで作品を作ったり、作品の各パーツの意味を説明したりさせた。最後に、その発表を聞いての感想を発表し合った。友達の前では、「宇宙の様子」だったが、作品の紹介後は気持ちが少し伝わったように思う。

ウ「いろいろな気持ちを組み合わせてみたら」

【心のタワー】

気持ちと表現を一体化して学習することで、自分の気持ちにあった形をつくり、子どもたちだけで作品の完成まで進んで活動することができると考えた。作品の形や表現方法は違うが、それぞれの子どもの思いは、これまでの気持ちとのつながりの学習を生かしたものに変わった。モビールでは、針金の加工に教師の補助が必要になる子もいたが、「心のタワー」は、制作過程が子ども自身の力で行えるというよさがある。しかし、モビールづくりは作品が動き、常に作品に変化があり多面的に鑑賞できるという意味では、発達障害を有する子どもたちにとって教材としては優れているだろうと考える。



〈Bの作品〉



〈Bの作品の各パーツ〉

①	がまんの気持ちです。たとえば、何か言いたいのにいえない。そういうことです。でも少し希望があるということで、黄色を入れました。
②	これは心です。いろいろな気持ちがあります。なぜ作ったかという私の心は、いろいろな気持ちがあるからです。
③	ありの巣です。穴がたくさんあるから、さびしさがあるということです。
④	これは、ドラマです。なぜかという、だんだん色が変わっているということ、だから気持ちが変わっていく、気持ちのドラマです。
⑤	これは何に見えますか。クッキーに見えますか。私は、これをつくったとき、何も考えずつくりました。だから答えはありません。でも、何かに包まれているように思えます。あと、うらはさびしいように思えます。
⑥	周りにはいろいろな色に包まれています。周りというのは人間でたとえると、体です。私はさびしい。ピンクは嬉しい。体はやみ(闇)以外の色でした。そして、中、つまり心は、やみになっています。そして、穴が開いたようにしました。なぜつくったかという、周りでは、優しくニコニコしていても心は、やみのような気持ちに時々なるからです。
⑦	忘れたようにつくった。「忘れたように」というのは、何か忘れ物をして、もやもやするという意味です。そういう日があったまにあるのでつくった。あと表は、もやもやしているけど、表、つまり心の奥は、レインボーにしました。その意味は、とっても、もやもやして少しは、希望があるということです。
⑧	とうめいなようにした。少しピンク色でぬって、優しくようにした。あと、水色やオレンジを入れて、あざやかにしました。

〈資料9 Aの作品の作品をつくったの感想〉

(3) 視点3

「人とつなぐ」ようにするための実践

視点3の「人とつなぐ」為の実践として、「お面づくりと劇」を行った。

ア「思いを込めたお面をつくる」

【お面づくりと劇】

自分の思いとつなげたお面づくりを行った。そして、国語の「物語をつくらう」の学習とつなげ、完成したお面を使って、分校の友達や園の心理士の先生方に見てもらった。制作には、マニラボールを1cmの幅にした。制作には、マニラボールを1cmの幅に切り、それをホチキスで止めながらお面の形にした。ビニール袋に入れ、その上から新聞紙をアラビア糊で貼り、書写の時間に使った半紙を貼り重ねた。固まったお面に絵を描き、色をぬったり花をつけたりしてニスを塗り完成させた。

「どの子ものりで貼ることを楽しんでいた。」

完成したお面のできばえに満足したようだ。「どんなお面をつくったのか」という問いに、「自分の意見をはっきり言いたいから口を大きく開けた」「かわいくなりたいたいからリボンをつけた」「ときめきたいから、ほっぺと目をばっちりとした」「あこがれの自分にしたいからピンクの毛糸で一部を三つ編みにした」「周りのことがよく聞こえるように耳をつけた」と答えているように、かなりこだわった作品にしようと意欲を持って取り組んだことがわかる。

自分たちのお面のキャラクターの特技や性格を生かし各人が物語を作った。それを元に再構成し、「幸せみつけ」という子ども達全員心が温かくなるような脚本を作り、台詞を修正しながら完成させた。

分校の友達も真剣に見入り、それを感じたクラスの人々も役になりきって真剣に演じることができた。後日、心理士の先生方にも

〈資料 10 子どもたちの感想から〉

- ・初めてモビールをつくった。大変だったけど、楽しかった。
- ・ママに、いろいろな自分を見てほしくてつくった。おこっている自分やうれしい気持ち、いろいろな物をつくった。いろいろな色を使ったり、指で模様をつけたりした。このモビールでいろいろな自分をママに見てほしい。私はつくっている時、怒っている方がつくりやすかったし、つくってみたかった。怒っている気持ちも大切だけど、私は嬉しい気持ちが自分が怒っている自分をたくさんつくるより嬉しい。自分を怒っている自分よりたくさんつくりたいです。
- ・初めは、紙粘土でつくるのはできるのか？ と思っていたけど、自分なりの気持ちの表し方ができたのでよかったです。あと、手紙は嬉しさが残っていくので、よかったです。
- ・いろいろなことを考えながらつくるのは楽しかったです。

〈資料 11 心理士の先生のコメントの一部〉

今回のモビール制作の取り組みですが、とても素晴らしいと思った。他の心理士にも意見を求めた。共通事項は、下記3点にまとめてみた。

- 1 取り組みは大変素晴らしい。芸術療法といえる。
- 2 是非またやってもらいたい取り組みであるし、他の人の参考にもなると思うが、①子どものイメージの引き出し方と②子ども集団におけるコミュニケーションのコントロールについて注意してほしい。
- 3 今回の取り組みは、2の①②ともうまくいっているようだが、どのような声かけ、引き出し方や介入をされたかどうかが？ 興味がある



〈お面作りの途中〉



〈友達に劇の発表〉

〈資料 12 分校の友達の感想より〉

- ・お面がかっこよかったです。全員協力してたからすごかったです。(2年)
- ・仲間を助けること(いいこと)をすると幸せだということが分かった。Bさんは声も顔も上手に使っていたからすごいと思った。(3年)
- ・最後に幸せが見つかったからよかった。みんなの演技が上手だった、すごく本格的だった。また見たい。(4年)

〈資料 13 心理士の先生の感想の一部〉

- ・制作した作品には内面と投影しやすいものであり、制作過程で様々な感情の動きがあり、それに気づき、完成でいったん整理されるものかと思う。整理されたもの(お面)を使って(動で)表現することで改めて気づくことがあるように感じた。
- ・自分に与えられた役を全うしたことで、自身になり自己肯定感が高まったのではないかと。
- ・ストーリー制作で、それぞれが抱えている問題や内面が少なからず投影されていることから、それらを劇という客観的で社会化された方法で表現することで、その子自身が自分の問題を捉え直すことに役立ったのではないだろうか。
- ・集団ですることによって意味があると思った。自分の内面を表出することで、集団で表現するとどうしても恥ずかしく防衛が強くなると思うが、みんなよく演じていたと思う。これは、自分の内面を受け入れてもらえるという安心感があると思われる。現在のクラスの集団を安心できる場所と認識しているものと感じた。



〈劇を終えて〉

劇を見ていただき、子どもたちの頑張りやクラスの子どものつながりを高く評価していただき、アートセラピーとしての効果の有効性を認めていただいた。(資料13)

4. おわりに

子どもたちは、これらの実践を通して「図工が好きになった」「もっと好きになった」という感想を持つてくれた。また、「表現することの楽しさ」や「表現することの自由」を感じることができたようだ。それと同時に、「自分が好き」になったり、「人が好き」になったりする気持ちが少し強くなったと思う。生活の場である園でも、子ども達の心の変化を感じてもらっているようで、指導員の先生から素直になったことや自分の思いを話してることが多くなってきたなどの声をうかがうことができた。劇を終えて心理士の先生から「クラスの子どもたちは本当に仲がいいです

ね。とても、いいクラスですね」と話していたことをとても嬉しく感じた。次に、どんな造形活動を行うのか、図工の時間を楽しみにする子どもたちに、どんな素材との出会わせ方をしようかと楽しみながら考える自分がある。

5 成果と今後の課題

(1) 成果として

「自分のことに気づく」視点では、間違いや失敗がないことで、自分の表現について安心感や自信を持つことができたし、造形活動の楽しさや多様な表現のよさを味わうことができた。「自分を表現する」視点では、形や色やぬり方など、それぞれに視点を当てながら描くことで、表現の幅が広がり、自分と人との違いを意識し、自分らしい表現について考え造形活動を楽しむことができた。「人とつなぐ」視点では、作品鑑賞の感想発表を友達に行うことで、お互いの作品に対する見方や考え方を変えることができた。また、劇として発表する意識を持つて作品の制作や脚本づくりをしたり、発表したりすることで生き生きと目的を持って造形活動を行うことができた。また、その劇を通して他の友達や心理士の先生方も気持ちがつながり、達成感を味わうことができたようだ。また、クラス内や分校や園での子どもたちの生活が穏やかに

なると共に、周りの人とのコミュニケーション

ションも随分と円滑に行われるようになっていた。一人一人の心が安定し、お互いを思いやるような言動も増えているようだ。これまで心の安定をめざし造形活動を行ってきたが、本実践で一定の成果を出せたと思う。造形活動を通して、子どもたちが自分の心の中を見つめ、それを作品として表出、制作し、仲間集団に表現し、それを受け入れてもらったことで、より安心感を得ることができたようだ。生き生きと造形活動に取り組むようになった子どもたちの姿が、一人一人のセルフイメージの高揚に有効だったといえよう。

(2) 課題として

子どもたちの心にある感情のもとになる事象に、どれだけ深く迫れたかは、十分ではない。教師と子どもたちのつながりや関係づくりを日常的に進めることで、アートセラピーとしての効果も高まってくると思われる。気持ちとつながる多様な表現方法があることは理解できても、実際の表現が自分の思いと一致するまでには至っていない。多様な造形活動を気持ちとつなげながら、体験する時間をかけて育てていく必要がある。更に、作品の鑑賞では、子ども同士の関係づくりがきちんとできていないと子どもの心を傷つける結果となる。今回、集団の育ち方から劇や作品の鑑賞を行ってきたが、もっと厳しい心理状態や生活状況に視点を当て子ども同士の関係を意識しながら、造形活動による集団づくりを実践していく必要がある。